Publisher's Review
パブリッシャーズ・レビュー
●東京大学出版会・白水社・みすず書房のPR紙●

みすず書房の本棚
［無料送付］
No. 14　2015 春　（表示価格は税別です）
113-0033 東京都文京区本郷5-32-21　tel. 03-3814-0131　http://www.msz.co.jp

ヘイト・スピーチ法規制論議の土台となる必読の書

師岡康子

本書は、アメリカのある街角で、ムスリム（イスラム教徒）の一人の男性が、十歳の娘と七歳の息子を連れて歩いている際、「ムスリムの奴らを中にいれるな」と書かれたポスターに出くわし、娘から「あれはどういう意味なの、パパ」と聞かれ、答えに窮する場面からはじまる。

日本と同様、ヘイト・スピーチ（差別煽動表現）が合法であるアメリカでは、マイノリティに属する彼は、いつそうしたポスターや書籍、罵声に遭遇するかわからない状況に置かれている。

彼は、このように不安におびえる状況に、「表現の自由」という権利の保障一般のために、耐えなければならないのか？

これはまさに、ヘイト・スピーチの蔓延する日本でも問われていることである。二〇一四年二月、大阪でのヘイト・スピーチ規制についての講演会の会場で、ある在日コリアンの男性は、「大阪では毎週末、どこかで差別デモが行われており、自分は子どもたちを連れて外出するのに、常に情報をチェックし、それでもいつ出くわすのか不安だ、あのデモを止めることのできる法律をなぜ制定できないのか」と問うた。京都朝鮮学校襲撃事件では、教員、保護者たちは、子どもたちの目の前で、レイシスト集団から「犯罪朝鮮人」「保健所で処分しろ」「キムチくさい」と貶められ、警察も現場にいながら、それを止めなかった。保護者の多くは、後から子どもたちに、「朝鮮人って悪いことなの？」と聞かれたことが一番つらかったと述べている（中村一成『ルポ・京都朝鮮学校襲撃事件』二〇一四年、岩波書店・参照）。

この問いは、ヘイト・スピーチのもたらす害悪の本質を示している。日本におけるマジョリティである大和民族の日本国籍者は、子どもと外出する際、いつ、自分がその属性ゆえに侮蔑されたり、公けの場所に入るなと言われて恥をかかされたりするかもしれないなどと考えることなく、「普通」に安心して出かける。隣にすむ在日コリアンの家族が日常的にそのような不安にさらされて、そのような「普通」の生活が保障されていないことを想像すらせずに。

本書は、この問いに対し、ヘイト・スピーチのもたらす害悪とは何なのか、法規制は何を守ろうとしているのかについて、アメリカの政治哲学研究者の立場から、理論的に、また、アメリカの歴史と現状を踏まえ、わかりやすく本質を突き詰めたものである。

本書の中で、この問いに関連して、印象的なエピソードが紹介されている。一九六四年当時、公民権法（人種差別禁止法）制定の必要性について、当時のリンドン・ジョンソン大統領が、「人間には、自分の子どもの前で侮辱されない権利がある」と述べたという。

そのことを、著者は、「各々の集団の各々の成員は、他人による敵意、暴力、差別、あるいは排除に直面する必要はないという安心」を、空気や水と同様に、一つの公共財として保障されるべきだと説明する。誰もが等しく「尊厳」をもち、暴力、排除、尊厳の否定からの保護に値すべきであり、マイノリティの成員であっても、社会の中で、周りの他の人たちとともに、普通に交流し、同じように取り扱われるという社会的立場、地位が保証されるべきであり、そのような基本的な社会的地位が「尊厳」の本質であると看破する。そして、ヘイト・スピーチ規制法が守ろうとしているのは、まさにこの平等な社会的地位としての「尊厳」であり、単なる不快感、感情ではないと述べている。

この「尊厳」の概念は、ヘイト・スピーチとは何かを判断する際に最も重要なものであり、国連人種差別撤廃委員会が二〇一三年に出した「人種主義的ヘイト・スピーチと闘う」と題する一般的勧告35においても、ヘイト・スピーチとは「人間の尊厳と平等」を否定するもの（パラグラフ10）と指摘されている。

同勧告を中心になって作成した国際法研究者のパトリック・ソーンベリー前・国連人種差別撤廃委員会委員は、昨年二〇一四年十月の来日講演において、ヘイト・スピーチとして規制すべきなのは、単なる不快な表現ではなく、人間の尊厳を傷つける表現であることを強調し、その意味については本書を読むよう推薦した。本書は、同勧告の内容を読みほぐす絶好の道しるべともなるだろう。

その他、本書では、「ヘイト・スピーチ規制は憎悪を地下においやるだけではないか」「政府が差別禁止に取り組む義務を負えばよいので、一般私人の表現についてまで義務を負わせるべきではないのではないか」「尊厳を傷つける表現と単なる不快な表現との境界線を引くのは困難ではないか」などの、日本でもすでにヘイト・スピーチ規制をめぐり議論されている論点について、大変説得的な主張が展開されている。

本書は、日本でヘイト・スピーチ問題に取り組む研究者や当事者の間で、以前から話題となり、翻訳の完成が切望されていた。アメリカでの憲法研究者たちを中心とする規制反対論は、日本へも強い影響を与えている。その意味からも、二〇一四年に国会でヘイト・スピーチ対策についての検討がはじまった日本にとって、議論の共通の土台とすべき必読の書である。

（もろおか・やすこ　弁護士）

■本紙の表示価格は**税別**です。

「表現の自由」との相克に応える

ジェレミー・ウォルドロン
《ヘイト・スピーチという危害》
谷澤正嗣・川岸令和訳

ほとんどの民主主義国家がヘイト・スピーチ規制の法律を持つなかで、アメリカは日本と同じく、法的規制がない、世界でも数少ない先進国である。本書はそんな「ヘイト・スピーチ規制のない国」から、ヘイト・スピーチの定義、その問題点、法規制の根拠を、様々な角度から考えていく。

アメリカではリベラルな法学者の大多数が、ヘイト・スピーチ規制に反対している。どんな差別的表現も、市民の重要な権利である「表現の自由」として許容されるべきだという。では一方で、差別発言の標的にされた人々は、いつどこで攻撃されるかもしれないという恐怖を背負って生きていくべきなのだろうか。

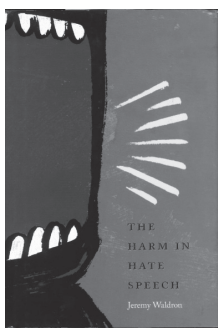
著者は、ヘイト・スピーチを「ヘイト」という観点からのみ考えると、ことの本質を見誤ると指摘する。つまり、その都度誰かにぶつけられる憎しみが、ヘイト・スピーチの本質ではない。そして、人が嫌がることを言ってはいけない、ということは、法規制の根拠にはならない。

攻撃対象となった人々の心が傷つくから、ヘイト・スピーチは規制されるべきなのではない。そうではなく、ヘイト・スピーチは人の尊厳を傷つけるから規制されるべきなのである。尊厳が守られるとはどういうことか。それは、侮辱され屈辱的な目にあう危険がなく、ひとが道を歩けるということだという。ある人々が社会で暮らすことが危険になってしまうことに問題があるのだ。ヘイト・スピーチは、社会の脆弱な成員たちの尊厳に対する計算された侮辱であり、包括性という公共財に対する攻撃だと著者は言う。

この「ヘイト」に焦点を当てない考え方は、個人の思想や内面を処罰の対象にしないということにつながる。では、尊厳を守るためにヘイト・スピーチを規制することと表現の自由はどう両立するのか。本書はヘイト・スピーチを規制しようというときに、必ず直面しなければいけないやっかいな問題を論じていく。

ヘイト・スピーチと民主主義社会の基盤である「表現の自由」との相克をどうすべきか。個人と集団、規制と自由、寛容と中傷をめぐる様々な論争を紹介し、ヘイト・スピーチとは何か、それは社会に何をもたらすのかを明らかにする。

［社会］【四月中旬刊】
（四六判・344頁・予価四二〇〇円）



患者のための医薬を取り戻す

デイヴィッド・ヒーリー
《ファルマゲドン　医薬の背信の時代》
田島 治監訳　中里京子訳

なぜ医師たちは、患者の顔を見ずにパソコンの画面を見ながら話すのか、という疑問と、（ノバルティス社の臨床試験疑惑のような）医薬業界の相次ぐ不祥事の温床はどこにあるのかという疑問。じつはどちらも、水面下で拡大する医薬業界の構造問題に直結している。「薬とカネ」のスキャンダルをいくら叩いてもそれだけでは抜け出せないような巨大な錯誤に、同時代の医薬業界全体がのみこまれていると著者は言う。「問題は、科学に民間企業が関与したことではなく、政府も含めたあらゆる利害関係者を科学のルールにのっとって行動させることができないでいる、私たち全員の失敗なのだ。」

著者近影

『抗うつ薬の功罪』の著者が、今回も渾身の告発をおこなっている。なかでも、臨床試験データの不開示、改竄などの不正操作、論文のゴーストライティングの問題を徹底して追及している。そこからは、科学への信頼を逆手にとったトリックが特許薬とその需要（＝病人）をつくりだし、医薬のあらゆる側面が人間よりもその経済に奉仕させられているという、ディストピア的様相が浮かび上がる。

著者は、臨床試験データの完全公開、処方箋薬制度および、薬の製品特許制度の見直しをはじめ、いくつかの抜本的な改革案を示している。それはいわば、医薬に関わる知識と権限を民主化し、ボトムアップでディストピアを解体するという構想である。

［医療・医学］【四月上旬刊】（四六判480頁・予四二〇〇円）

今後を考えるための重要基本書

アンドレイ・ランコフ《北朝鮮の核心　そのロジックと国際社会の課題》
山岡由美訳

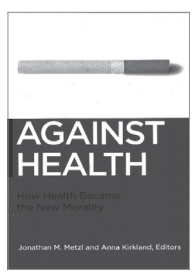
「本書を終えるにあたり何をいえばいいだろう。おそらく二つの残念な話から始めるのがよいだろう。一つ、北朝鮮は国自体が問題と化している。二つ、この問題を解決する手っ取り早い簡単な方法はない。［中略］この国の歴史の切ないところは、主な登場人物の多くが元は慎ましい人で、崇高な動機に突き動かされていたことだ。彼らが下した決定は、その時点では道理に適っているように思えた。しかしそれが積み重なった末に完全な混沌が現出し、もはや誰もが受け入れられる簡単な解決策など全くない状態となってしまった」（本文より）。

本書は第一に、北朝鮮の建国から混沌へと陥る歴史を分析するものである。北朝鮮のリアルな日常を伝えるコラムやユーモアも織り交ぜ、読ませる歴史書となっている。第二に北朝鮮の政治ロジックを解明、第三に、現実的な対処法を諸外国へ提案するものである。いずれも独自の経験と情報網、そして学識に基づく鋭敏な知見に満ちている。

著者は冷戦下のソ連に生まれレニングラード大学で博士号を取得、交換留学生として北朝鮮にも学び、現在はソウルの国民大学校教授。国際的に知られる専門家の中でも最も北朝鮮近くに拠点を置く一人である。本書の原書は一昨年の初版後、昨年暮れに改訂版が刊行された。日本語版はその最新版に基づいている。今後の北朝鮮について考える上で、今、最も充実した一冊と言えるだろう。

［東アジア現代史・時事問題］【六月上旬刊】（四六判368頁・予四八〇〇円）

▼**関連書**　民主制度は構築されたが政治は腐敗と暴力の中に。情勢悪化の原因と経過を明解に分析。**ドッジ**『**イラク戦争は民主主義をもたらしたのか**』（三六〇〇円）▽単なる極東の国境紛争ではなく第二次大戦の重要な契機として捉え直す世界史の中のノモンハン。**ゴールドマン**『**ノモンハン1939**』（三八〇〇円）以上山岡訳▽「一億一心」の裏側の混乱と日米関係の基層にある差別や偏見を直視。**ダワー**『**昭和――戦争と平和の日本**』明田川融監訳（三八〇〇円）▽民主主義がテロとの戦いに至る経緯を冷戦まで遡り検証。**ハルトゥーニアン**『**アメリカ〈帝国〉の現在**』平野克弥訳（三四〇〇円）▽同『**歴史と記憶の抗争**』K・M・エンドウ編・監訳（四八〇〇円）。



「健康」概念が含むイデオロギー

メッル／カークランド編《不健康は悪なのか　健康をモラル化する世界》
細澤・大塚・増尾・宮畑訳

なぜ私たちは、健康でなくてはいけないのだろうか？今日「健康」と呼ばれているものは、以前からある概念が拡張したものなのだろうか？それとも現代の生-政治が作り上げた新しい力なのだろうか？

メディアによって作られる美意識、公共広告が喧伝する道徳――今日の「健康」という概念には、医学的問題を超えたイデオロギーが含まれている。肥満、強迫症状、放射能、遺伝子医療……「健康」概念はどんな外圧にさらされて生み出されるのか。また、「健康」概念は社会を動かすどんなイデオロギーや道徳と繋がっているのか。

医療経済・資本主義経済を駆動させ、ときに法措定的な力にまでなっていく「健康」という概念。本書は歴史的な視点をしっかりと踏まえたうえで、この概念を生み出す構造そのものに警鐘を鳴らす。医療人類学、生命倫理学、文化人類学、フェミニズム研究、文献学、障害学、法学など、多様な立場の著者たちが多面的な切り口で「健康」とは何かを解き明かす挑戦的な一書である。

［医療・社会学］【四月中旬刊】（A5判304頁・予五〇〇〇円）

▼**医療関連書　既刊より**

貧困国での無償医療活動で著名な医師による、構造的暴力のみごとな分析と実践的処方箋、**ファーマー**『**権力の病理　誰が行使し誰が苦しむのか**』豊田英子訳・山本太郎解説（四八〇〇円）。不妊治療と再生医療研究が結びつく道筋を照らし出す画期的論考、**柘植あづみ**『**生殖技術**』（三二〇〇円）。最善を尽くせば医療は変わる。科学でなく人の力で変わる医療現場を描くノンフィクション、**ガワンデ**『**医師は最善を尽くしているか**』原井宏明訳（三二〇〇円）

危急の〈社会問題としての通訳〉

水野真木子・内藤稔《コミュニティ通訳　多文化共生社会のコミュニケーション》

グローバル化する現代日本の病院や薬局で、警察や裁判で、役所や学校で。現場は日常どのような事態にあり、そこで何ができるのか。

超音波検査を受けた妊婦さん。「はっきりとはわからないが」を十分訳せなかったために、家族は赤ちゃん用品を全部女の子用で揃えてしまった……放火事件の裁判員裁判で、被告人の母語の通訳人はいないので英語で通訳する。ガラスの割れるガチャンやバリンはどう訳す……市役所の窓口に夕刻やってきた女性はなかなか口を開かない。生活保護の相談だとやっとのことで聞き出して、閉まりかけた庁舎の担当課へ同行する……

医療・司法・行政通訳を柱に、手話通訳、難民申請やDV相談、災害時など有事のさいの通訳にも目配り。全体像を建設的に提示する、日本のコミュニティ通訳初の概論。

社会人の学び直し、特に少数言語のわかる外国出身の通訳者が日本の社会・文化について学べる場の必要や、大学間あるいは教育機関と専門機関の多様な連携の可能性など積極的な提言に満ちている。

日々現場に立つ実務者、通訳を志す人、研究者、通訳を使う側の専門家と各機関そして多文化社会に生きる市民すべてに関心をよせてほしい。

［現代社会・通訳翻訳研究］（A5判・256頁・三五〇〇円）

生まれてきた不思議・死んでゆく不思議・生まれてこなかった不思議

西平 直《誕生のインファンティア》

子どもの頃、死んだらどうなると思っていたか。誰かに聞いてみたか。子どもたちには「わかる」のか。大人の理解とどう違うのか。子どもより大人のほうが、より「わかって」いるのか――

「死」を初めて意識した記憶、体験を学生たちに自分自身の言葉で書いてもらうことを著者は十数年にわたって続けてきた。さらに、「子どもの頃、赤ちゃんはどこから来たと思っていたか」の問いかけに対する学生たちの言葉。

フロイトやクラインが伝える子どもたちの言葉。胎児をめぐる諸研究や生殖補助技術で生まれた子どもたち……さまざまな出生と死の位相をわたりあるきつつ、哲学や精神分析、文学作品の中にあらわれた死の問いと誕生の問いをたんねんに読んでゆく。そこからうかびあがってくるのはある時ふと感じる「自分がいること」の不思議、そして「自分が存在しないこともありえた」非存在の可能性である。

生まれる前の〈非在〉と、死んだ後の〈非在〉の質の違いを確かめつつ、ふたつの間に挟まれた「存在」の地平を確し、さらに今もはたらいている「自分がいない〈不生〉の地平」に光をあてる時、生きている不思議が私たちに触れてくる。

私たち大人が突きつめて考えることを避けがちな死と誕生にまつわる子どもの頃の記憶を蘇らせ、哲学の重要な問いでもある死生学を「子どもの頃」の視点から考え直す。

［死生学・哲学］【四月上旬刊】（四六判296頁・予三八〇〇円）

みすず書房新刊

（2014・10～2015・3）
東京・文京・本郷5
℡〇三三八一四〇三三
（価格は税別です）

ポーランドと他者　文化・レトリック・地図　**関口時正**　随一の研究者初の文化論集。ショパン、マリノフスキー、カントルら、時代と分野を貫く精神との対話と批評。六六〇〇円

丸山眞男 話文集 続3　「民主主義の名におけるファシズム」「陸（最上）家訪問録」「楽しき会」の記録…全7編。［全4巻］**丸山眞男手帖の会編**　五〇〇〇円

ファビアン あるモラリストの物語　**ケストナー**　大胆なモラリストにして辛辣な風刺家E・ケストナー唯一の大人向け長編を初の完全版で贈る。**丘沢静也訳**　三六〇〇円

量子論が試されるとき　画期的な実験で基本原理の未解決問題に挑む　**グリーンスタインほか**　非局所性や観測問題などの難題を創造性溢れる実験で探究する現代量子物理学の挑戦。**森弘之訳**　四六〇〇円

ベルリンに一人死す　**ファラダ**　ヒトラー政権に刃向った庶民夫妻の運命は？今になって世界を震撼させるリアリズム小説の傑作。**赤根洋子訳**　四五〇〇円

リトルネロ　**ガタリ**「まるでフェリックスが戻ってきたような…」（ドゥルーズ）。死の直前に書きあげられた詩的自伝。**宇野・松本訳**　四八〇〇円

ツェランの詩を読みほどく　**相原勝**　西欧と死の国、キリスト教とユダヤ人、シオニズムとの葛藤、人間イエスに倣って――。41編の詩と真実に迫る。三六〇〇円

21世紀の資本　**ピケティ**　資本主義は自動的に大きな格差を生み出す――経済議論を変えつつある、世界的ベストセラー。**山形浩生他訳**　五五〇〇円

哲学への権利　1［全2巻］　**デリダ**　なぜ哲学を学ぶのか。哲学の削減に抗し、政府を動かしたデリダの哲学教育闘争のすべて。**西山・立花・馬場訳**　五六〇〇円

青のパティニール　**最初の風景画家**　**石川美子**　歴史の闇から浮上した、十六世紀フランドルの画家。希少な全作品と文学を結ぶハイブリッドな研究エッセイ。五〇〇〇円

正義はどう論じられてきたか　相互性の歴史的展開　**ジョンストン**　古代の「正義の源流」を繙き、今日の正義をめぐる議論に新たな見取図を示す。**押村・谷澤・近藤・宮崎訳**　四五〇〇円

本は友だち　**池内紀**　そっと背中を押してくれる、友だちみたいな本。会いたい人と会うように読み綴る、本への愛に満ちたエッセイ。三〇〇〇円

形式論理学と超越論的論理学　**フッサール**　論理学の根本法則をいかに現象学的に基礎づけるか。『論研』から『危機』へ、中期の代表作。**立松弘孝訳**　七〇〇〇円

植物が出現し、気候を変えた　**ビアリング**　植物の進化・繁栄が地球システムをダイナミックに作り変えた！「緑の地球」の五億年史。**西田佐知子訳**　三四〇〇円

動いている庭　**クレマン**　現代造園の世界に新たな哲学を提示する庭師の手法と思想が詰まった代表作。カラー図版120頁。**山内朋樹訳**　四八〇〇円

プラハのバロック　受難と復活のドラマ　**石川達夫**　劇的で複雑な歴史の襞に分け入ってプラハ・バロックの豊かさと精神性を展覧する研究書＝魅力的な紹介の書。六二〇〇円

グローバリゼーションと惑星的想像力　恐怖と癒しの修辞学　**下河辺美知子**　今日における人文研究の意味と役割とは。18・19世紀アメリカからスピヴァク、アレント、ド・マンまで。三八〇〇円

世界宗教の発明　ヨーロッパ普遍主義と多元主義の言説　**増澤知子**　19世紀の比較言語学と宗教学によるアーリア語と仏教の発見を通じて、西洋の自己形成を探る。**秋山・中村訳**　六八〇〇円

大隈重信関係文書　11　よこーわら　**補遺他**　大隈宛て書翰約七四〇〇通を編纂し、公刊。全1巻完結。**早稲田大学大学史資料センター編**　一五〇〇〇円／全巻揃価一一九〇〇〇円

量子力学の数学的基礎［復刊］　**ノイマン**　コンピューターやゲーム理論の先駆者の主著。ヒルベルト空間論で数学的に基礎付ける。**井上・広重・恒藤訳**　五二〇〇円

相対性理論［復刊］　**メラー**　相対性理論の教科書。特殊相対性理論と一般相対性理論を、三次元的定式化を中心に講義を行う。**永田・伊藤訳**　七四〇〇円

古典物理学を創った人々　**ガリレオからマクスウェルまで**［復刊］　**セグレ**　落下法則の確立から電磁波の発見まで。近代物理学を形成した学者たちの姿を鮮やかに描写する。**久保・矢崎訳**　七四〇〇円

地域再生をここから

濱田武士・小山良太・早尻正宏

《福島に農林漁業をとり戻す》

東日本大震災にともなう福島原発事故から二〇一五年三月で五年めに入る。被害の範囲も確定されないまま、原発災害の苦しみは続く。

福島の米や野菜から放射能はほとんど検出されず、海水の放射能含有量は事故前に戻ったが、風評被害は残る。原発から汚染水が漏れるたびに、漁業者の試験操業は影響を受ける。山林は除染されず、放射能の「封じ込め」の場となってしまうのか。

本書は農・林・漁業の経済学を専門とする研究者がなりわいの再生という難問に取り組む。山に大地に海に降り注いだ放射性物質は循環するため、農・林・漁業をつなぐ視野に立つ。

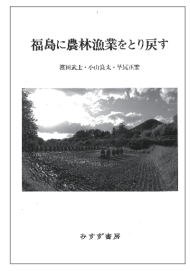
福島には、自然とともに生きてきた人、ふるさとをあきらめない人、復興するしかないとする人々がいる。各地で「協同」が生まれ、多様なとりくみがなされた結果、データと知見が蓄積している。筆者たちは実践的にかかわった経験から歴史・政策・科学的視点・実態を踏まえて考える。

放置されたシイタケ栽培用の原木

原発汚染水問題と漁業再開のゆくえ。山林保全という公共性を担う森林組合。米の全袋検査。農地の放射能計測とマップ化。作物への移行率を基礎に農地一枚ごとに栽培計画をつくり、検査体制を体系立てて、再び安全な食材の産地を掲げるための道筋。

福島に農林漁業をとり戻すことは、人と自然の営みを、地域と産業を再生することだ。長い闘いの先に、復興が見えてくる。

それを支えるのは、同じ国土に生き、社会経済に原発を組みこんできた私たちみんなの問題である。［地域経済学］（四六判・356頁・三五〇〇円）



『徳川時代から受け継がれる経済と倫理』

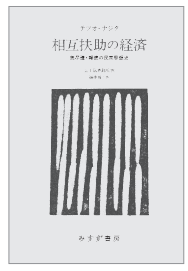
テツオ・ナジタ　五十嵐暁郎監訳・福井昌子訳

《相互扶助の経済　無尽講・報徳の民衆思想史》

それは飢饉が慢性的に襲った時代で、しかもお上は頼りにならなかった。庶民は緊急時の出費に備え、互いに助け合うしくみを発展させる――無尽講・頼母子講だ。講は身分を問わず参加できる集団型の融通制度。その前提となったのは、庶民にも道徳意識があるという確信で、この時代、経済と倫理は不可分だった。

徳川末期、二宮尊徳が始めた報徳運動も、お上の支援を拒否して自助による村の再建を掲げ、民衆の尊厳をとり戻すという農業の実践だった。

日本は近代化を急ぐ過程で、これらの「旧弊」を率先して否定し無視する。しかし明治維新や第二次大戦後の激動を庶民が生き延びたのは、この共済の営みがあったからだ。国民健康保険も、この伝統に接木されたもの。講のDNAは脈々と受け継がれた。著者は、地方の相互銀行の書庫までたんねんに調べ、この忘れられた実践がはらむ驚くべき現代性に光を当てる。［近世史・経済思想］【三月下旬刊】（四六判・400頁・五四〇〇円）



南ア問題への情熱の結晶、初訳

L・ヴァン・デル・ポスト　戸田章子訳

《ある国にて　南ア物語》

『内奥への旅』『カラハリの失われた世界』など、ベストセラー探検旅行記を著し、映画『戦場のメリークリスマス』の原作者として有名な作家のデビュー作。南アフリカにおける人種差別と異文化の対立・和解を主題とした小説で、二十世紀初頭の南アの激しい差別を扱い心を揺さぶる書。作家自身の体験に基づいた個人の良心と道徳性を問う問題作であり、現在、合衆国で再燃する黒人差別を考える本としても推奨したい一冊。主人公は、黒人少年との出会いを通して否応なく黒人への抑圧・迫害の只中に身を投ずることになる。白人社会から異端視され、悩み、道を模索する。時代と地域を越えた普遍的なテーマを追求。［英文学・アフリカ］【四月中旬刊】（四六判328頁・予三四〇〇円）

月刊雑誌《みすず》最近号より

［二〇一四年読書アンケート特集］外岡秀俊／村上陽一郎／上村忠男／加藤尚武／川口喬一／服部文祥／加藤幹郎／佐藤文隆／鈴木裕子／細川周平／永田洋／M・モラスキー／金森修／藤井省三／小西正捷／宮下志朗／佐々木力／石原千秋／中野晃一／五十嵐太郎／栩木伸明／永江朗／桑野隆／松本潤一郎／岡田秀則／竹内洋／阿部公彦／千田善／名和小太郎／最相葉月／早川尚男／山口二郎／柳与志夫／宮地尚子／N・フィールド／加藤典洋／坂内徳明／川那部浩哉／坂上香／関口すみ子／岡野八代／柿沼敏江／福嶋聡／廣瀬浩司／斎藤成也／鎌田慧／三島憲一／師岡康子／道場親信／細見和之／川端康雄／松永美穂／大野英士ほか（一・二月号）。明田川融「核兵器と「国民の特殊な感情」」（三月号）。（各三〇〇円）

書評コラム

『みすず』読書アンケートより

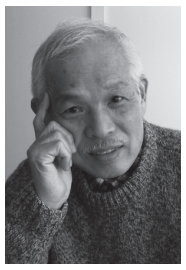
月刊『みすず』一・二月合併号では毎年「読書アンケート」特集を組み、ご好評をいただいています（本面下にも紹介）。157名のご回答のなかから、小社の刊行書へのコメントをいくつかご紹介します（敬称略）。

■鵜飼哲『ジャッキー・デリダの墓』デリダの巨大な仕事が、追悼の思考のなかに、万華鏡のように凝縮して語られている（宇野邦一、他に十川幸司、郷原佳以、李静和）**■アガンベン『いと高き貧しさ』**上村忠男・太田綾子訳　聖フランチェスコら托鉢修道者に「所有」せず、法権利の外で「使用」して生きる「生の形式」・政治の身振りを探求して、現代の大量消費社会に生き方の問いをつきつける（栗原彬、他に小松美彦、小沼純一）**■ピケティ『21世紀の資本』**山形浩生他訳　社会科学の一分野としての経済学の立ち位置を越え、「自由はないけど、便利で幸せ」といわんばかりのミクロの行動原理系の経済学を再考させる作品であった（勝俣誠、他にキャロル・グラック、喜安朗）**■チャトウィン『黒ヶ丘の上で』**栩木伸明訳　チャトウィンの文章がこちらの心身にはいってくる体験でした（小沼純一、他に阿部日奈子）**■フリン『統合失調症の母と生きて』**佐々木千恵訳　薬づけの医療と比して、この家族が悲しみを通してなんと豊かに生き抜いたことか。悲しみにも自然な悲しみと、人工的に歪められた悲しみがある（野田正彰）**■相原勝『ツエランの詩を読みほどく』**年代順に、主要な詩を読解する本書によって、積年のもやもやの多くが解消し、見通しがよくなった。コンパクトにまとまった見事な一書（澤田直）

他に、**ヒッチングズ『英語化する世界、世界化する英語』**（川那部浩哉）**サポルスキー『サルなりに思い出す事など』**（服部文祥）**ガーディナー編著『狼男による狼男』**（成田善弘）**ケリー『テクニウム』**（長野敬）**松尾尊兊『本倉』**（山田稔）**高橋たか子『終りの日々』**（酒井忠康）**クラウス『野生のオーケストラが聴こえる』**（川那部浩哉）**五島綾子『（科学ブーム）の構造』**（増田耕一）**鈴木了二『寝そべる建築』**（五十嵐太郎）**ベンヤミン『この道、一方通行』**（山根貞男）**『藤田省三著作集10』**（鈴木了二）**アーレント『アウグスティヌスの愛の概念』**（徳永恂）**ギャンブル『自由経済と強い国家』**（中野晃一）**川本徹『荒野のオデュッセイア』**（加藤幹郎）**メナール『パスカル』**（三原弟平）**シニャフスキー『ソヴィエト文明の基礎』**（杉山光信）**山本義隆『世界の見方の転換』**（金森修、小沼通二、小松美彦）など。

半世紀にわたる詩業を一巻に

《長田弘全詩集》



『われら新鮮な旅人』の鮮烈なデビュー五十周年を記念して、日本を代表する詩人の一人である長田弘の全・詩集を愛蔵愛読に相応しい瀟洒な一巻に集成する。

思潮社から刊行された『メランコリックな怪物』、その後、晶文社から出された『言葉殺人事件』『深呼吸の必要』『食卓一期一会』『心の中にもっている問題』『世界は一冊の本』『記憶のつくり方』、さらに、みすず書房刊の『黙されたことば』『一日の終わりの詩集』『死者の贈り物』『人はかつて樹だった』『世界はうつくしいと』『詩の樹の下で』『奇跡―ミラクル―』、その他『幸いなるかな本を読む人』（毎日新聞社）、絵本のために書き下ろされた詩篇など計十八冊を、これを以て定本とすべく補訂に努めた。

硬質な抒情詩人、ユーモアにみちたカジュアルな詩人、深い人生哲学に裏打ちされた成熟の詩人……その全貌を本書で通覧するとき、社会も文化も変容する半世紀にあって一筋の柔軟な線を貫いた、格別の「読み手」にして独特の「書き手」である、オサダヒロシという稀有な詩人の存在に思いを致されるに違いない。巻末に自筆年譜を付す。［詩集・日本文学］【四月下旬刊】（A5変656頁・予六〇〇〇円）

地球と環境を考える――いま読みたい3冊

デイヴィッド・ビアリング　西田佐知子訳

植物が出現し、気候を変えた

植物の進化と繁栄は、かつて想像されていた以上にダイナミックに、地球の景観や気候をつくりかえていた！陸上植物の出現にはじまる"緑の地球"の5億年の変遷を、最新の科学的知見をつぶさに参照しながら描きだす。

四六判　384頁　3400円（税別）

「過去5億年の地球の歴史を周到に論じながら、ぐいぐいと読ませる。ビアリングの語る物語は、10年前なら語り得なかっただろう。というのも、ここには古生物学、気候科学、遺伝学と分子生物学、化学といった幅広い分野の最新の知見がみごとに統合されているからだ。」

オリバー・サックス

多田隆治　［協力］日立環境財団

気候変動を理学する

第一線で活躍する研究者が、生きた講義の中で発せられる疑問を丁寧に拾いながら、複雑で動的な地球システムの本質を説き明かす、充実の地球システム学入門。

四六判　312頁　2400円（税別）

ヤン・ザラシーヴィッチ　江口あとか訳

小石、地球の来歴を語る

文字通り、"一個の小石に宇宙を見る"科学読み物の珠玉作。小石に閉じ込められた元素、鉱物、化石の来歴を調べ上げ、地球全史をエレガントに描きだす。

四六判　264頁　3000円（税別）

〒113-0033 東京都文京区本郷5-32-21
tel. 03-3814-0131 fax 03-3818-6435

みすず書房

http://www.msz.co.jp　（価格は税別です）
ニュースレター配信中．ウェブサイトよりお申し込みください

用語の背景にある近代（モダン）

高安啓介《近代デザインの美学》

デザインについて考える時、この語を生んだ「近代（モダン）」について問わない訳にはいかない。それ以前、企画や設計といった個々のプロセスとして語られてきた「物の成り立ち」は、「デザイン」の一語によって総合的に評価・鑑賞される視点を得たのである。しかしここでモダンとは何を意味するのか？形や美におけるモダンとモダンでないものを分けるのは何か？　気鋭の美学者が、日本文化における近代（モダン）の解釈＝事例を梃に、デザインにとっての近代を再検討する。

〈近代デザインにおいて鍵となってきた用語がほとんど当たり前のように使用されているかぎり、用語の背景について問い直しておく必要がある。たとえば、「造形」「構成」「形態」「空間」「表現」といった用語があげられる。今日のデザイナーがこれらの用語によって自分たちの仕事を説明しているのであれば、今日の取り組みのうちにも近代の諸前提がなお根強く残っているはずである。もちろんその理解のしかたが変化してきているとしても、それならばなおさら、何が変化していて何が変化していないかを見定めなければならない。

用語について検討することで、今日のデザイナーが意識しなくなった近代の諸前提をあらためて意識にもたらし、真に新しいデザインを構想するための足がかりとしたい〉

［デザイン・美学］【三月下旬刊】（A5判・304頁・三八〇〇円）

▼小社既刊のデザイン書

ペヴスナー『モダン・デザインの展開――モリスからグロピウスまで』白石博三訳（四三〇〇円）はデザインの黎明期の躍動が映しこまれた古典的ロングセラー。デザインの社会的役割、造形教育について考えつづけたイタリアのデザイナー、**ムナーリ『ファンタジア』**（二四〇〇円）**『デザインとヴィジュアル・コミュニケーション』**（三六〇〇円）**『モノからモノが生まれる』**（三六〇〇円）**『芸術家とデザイナー』**（二八〇〇円）以上萱野有美訳、また現役の巨匠**マーリ『プロジェクトとパッション』**田代かおる訳（三〇〇〇円）、日本を代表するインテリア・デザイナー**内田繁『戦後日本デザイン史』**（三四四〇〇円）は、これからデザインに関わろうとする人の必読書だ。

松村正恒《日土小学校》（愛媛県八幡浜市）

「最後のダベリング」ほか、全巻完結

丸山眞男手帖の会編《丸山眞男 話文集 続4》

「……「このような状況からいかに脱出するかについて著者が多くを示していない」という点はまったくその通りです。私は歴史家は、とくに思想史家は「うしろむきの予言者」という宿命を負っていると思っています。ですから、うしろに向きっ放しの「実証的」な歴史的せんさくと、前に向きっ放しの想像力に富んだ予言とはそれぞれ適当な人材にまかせて、私はどんなに「限界」はあろうと、この宿命的な途を歩んで行くつもりです。」（「埴谷雄高宛書簡」一九六一年一二月一日）

『丸山眞男話文集』全四巻完結後に発掘された、丸山眞男の座談などを続編として刊行。第四巻は、最晩年の最後の「ダベリ」と「丸山ゼミ有志の会」懇談会スピーチ、オウム真理教などの時事問題を、歴史の流れに位置づけ語った囲む会二編、アンケート・読後評・インタビュー、埴谷雄高、野間宏ほかに宛てた『丸山眞男書簡集』未収録書簡を収録する。全四巻完結。［政治学・思想史］【四月下旬刊】（四六判472頁・予五八〇〇円）

受賞図書のご案内

冨岡悦子『パウル・ツェランと石原吉郎』が、日本詩人クラブ主催の三賞のひとつ、第29回日本詩人クラブ詩界賞を受賞しました。大戦と収容所を潜り抜け、証言者として生き延びた二人の詩人、ツェランと石原吉郎の詩の難解なメタファーの下に隠された意味を丹念に解きほぐす力作評論が、高く評価されました。（四六判・272頁・三六〇〇円）

書評に紹介されました

▽**ディートン『大脱出』**「進歩と格差の終わりなきダンス」水無田気流氏（朝日1月11日）、「貧困、短命からの脱出」松井彰彦氏（読売1月4日）根井雅弘氏（北海道12月21日）小塩隆士氏（日経1月18日）▽**池内了『科学・技術と現代社会』**「研究者の倫理問う著者畢生の科学論」佐倉統氏（朝日12月4日）須藤靖氏（読売12月1日）▽**アガンベン『いと高き貧しさ』**「所有権の暴走が格差を生み、人びとの生存さえ脅かされつつある今、深く心に訴えかけてくる」杉田敦氏（朝日12月21日）（日経11月2日）▽**渡邊一民『福永武彦とその時代』**前田英樹氏（読売1月11日）▽**石川美子『青のパティニール 最初の風景画家』**川本三郎氏（毎日1月11日）他。

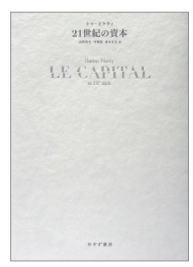
ピケティ 東大にて

『21世紀の資本』著者 トマ・ピケティ 来日ご報告

世界的ベストセラーとなった『21世紀の資本』の著者トマ・ピケティ教授（パリ経済学校）が一月末に来日されました。木曜午前に日本到着、日曜昼には離日、その間に都内で三回の講演のほか多くのインタビューに応じ、書店でのサイン会まで連日ぎっしりのスケジュールを笑顔でこなされました。

来日中のいずれのイベントにも数多くの方から大きな関心をお寄せいただき、感謝申し上げます。29日（木）有楽町朝日ホールでのシンポジウム「広がる不平等と日本のあした」、30日（金）日仏会館での討論会「格差・税制・経済成長」は、ニコニコ生放送（http://live.nicovideo.jp/）で生中継されました。31日（土）の「トマ・ピケティ 東大講義『21世紀の資本』」の模様は、東大TV（http://todai.tv/）で視聴できます。

本に挟み込まれた読者ハガキも多数ご返送いただいています。貴重なお声をまことにありがとうございます。



みすず書房 営業部だより

弊社は今年で創立70年となります。戦後すぐに興された出版社がとても多いなか、今日まで出版活動を継続することができたことは幸運なことだったのかもしれません。多くの読者の皆様にご支持いただいたことを深く感謝申し上げます。全国の主要書店にて記念のフェアを開催する予定ですので、その際はどうぞ足をお運び下さい。

『21世紀の資本』の著者、**トマ・ピケティ**氏が来日しました。短期間のうちに多くの講演や取材をこなして、嵐のように去って行かれました。テレビや新聞、雑誌など多くのメディアに登場し、目にされた方も多いと思います。来日最終日に行われたサイン会も大盛況で、大学教授のサイン会としては異例だったように思います。関連本も多く出版され、賛否両論ありの盛り上がりは暫く続きそうです。ピケティ氏が提示した格差の拡大を阻止するための提言は広く耳を傾けられたように思います。出版社冥利につきる素晴らしい出来事でした。

みすず書房 70周年

みすず書房は今年、誕生から70年を迎えます。

始まりは敗戦後すぐの一九四五年秋、復員した創業者の小尾俊人（おびとしと）が、かつての同僚であり学徒出陣で軍隊生活を共有した同郷の和田篤志に、出版社を興そうと手紙で呼びかけました。「東京で出版屋をやらうかとも思ふし、農業に従事しようかとも思ふ。どうしようか。君はいつ出てくるか」「何か仕事があつたら済ましてからでいい。身支度をして出てきてくれ」。設立発起人を募り、創業を申し合わせたのが同年十二月のことです。

創業出版は翌年七月の片山敏彦『詩心の風光』。当初、社名を美篤書房としましたが時代錯誤の用字であると読者からお叱りを受けたそうで、また漢字制限で作字もままならず、二冊めの坂田徳男『哲学への道』から現在のひらがなに改めています。初期は片山敏彦画の花籠をロゴマークとして印刷してもいました。

創業のころの小さなエピソードをご紹介してみました。今後も変わらぬご愛顧をぜひともお願い申し上げます。

みすず書房 近刊のお知らせ

5-6月の刊行予定から

技術システムの神話と真実
吉岡 斉・名和小太郎
ウイダーの副王
ブルース・チャトウィン　旦敬介訳
GDPについて
ダイアン・コイル　高橋璃子訳
ワシーリー・グロスマン作品集　1
――**システィナの聖母**　齋藤紘一訳
幸せのグラス
バーバラ・ピム　芦津かおり訳
鉱夫画家たち
ウィリアム・フィーバー　乾由紀子訳
20世紀を考える
トニー・ジャット他　河野真太郎訳
動くものはみな殺せ
ニック・タース　布施由紀子訳
活動的生　ハンナ・アーレント　森一郎訳

（http://www.msz.co.jp にもご案内）

みすず書房・最近の重版より

21世紀の資本	
T. ピケティ　山形浩生他訳	¥5500
いと高き貧しさ――修道院規則と生の形式	
G. アガンベン　上村忠男・太田綾子訳	¥4800
知覚の現象学　2	
M. メルロ=ポンティ　竹内・木田・宮本訳	¥5400
現代精神医学原論	
N. ガミー　村井俊哉訳	¥7400
心的外傷と回復［増補版］	
J. L. ハーマン　中井久夫訳	¥6800
高校図書館――生徒がつくる、司書がはぐくむ	
成田康子	¥2400
サードプレイス	
R. オルデンバーグ　忠平美幸訳	¥4200
ミトコンドリアが進化を決めた	
N. レーン　斉藤隆央訳　田中雅嗣解説	¥3800
科学・技術と現代社会　上・下	
池内了	各¥4200
量子力学［第4版・リプリント版］	
P. A. M. ディラック	¥4500